

書 評

50 冊で学ぶ 写真表現入門

著者：西垣仁美 藤原成一

発行：日本カメラ社 2019 年 2 月

とても役に立つ、便利な本が登場した。刊行から少し時間が経ってしまったが、ぜひ紹介したい。どのように役に立ち、何が便利なのかを説明するには、本書の“はじめに”と、帯（ハカマ）にも書かれている次の文を引用すれば、じつは十分なのかもしれない。本書は「この 1 冊で写真の必読書 50 冊がわかるマジカルブック」なのである。へたな書評は不要かもしれないが、しばし、おつきあいいただければと思う。

著者のお一人、西垣先生は、日本大学芸術学部写真学科で写真教育に携わっておられ、本学会誌の編集委員でもある。毎年掲載される“写真の進歩”では、写真表現の項を担当されており、ご存知の方も多いただろう。共著者の藤原先生も同校で教鞭をとられていた方とのこと。つまり写真教育の最高峰のひとつと言ってよい学校の先生方による著書になる。当然、学生さんの教育を強く意識されたものだと思う。これらの点からだけでも、多くの見解に配慮した偏りのない内容が十分期待できる。後で触れるように、評者は写真表現の専門家ではないが、正統派でバランスのとれた内容だと感じた。

一方、本書の帯には「さあ、写真に自信をつけよう！ 型破り写真入門！」とも書かれている。つまり本書は、型破りな本でもあるわけだ。多くの本を紹介し、写真論・写真表現論を真正面からわかりやすく解説、そこから写真へと誘う入門書は、評者は見たことがない。なるほど型破りだと思った。

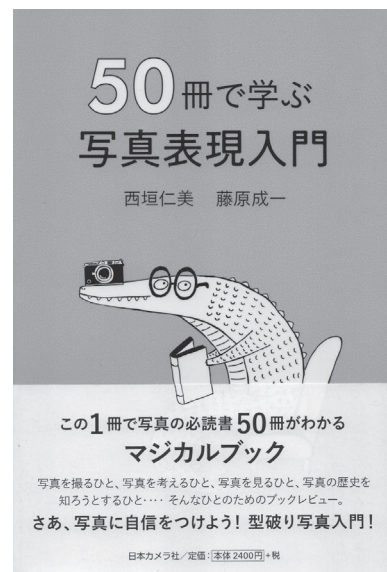
解説の文章は、原著の言葉を括弧 [] でくくって取り入れたスタイルで構成されており、自然な流れで読み進められ、とても判りやすい。さながら、授業で、先生が大事なポイントを挙げつつ、それを説明していくような感じだ。原著に赤鉛筆やマーカで線を引くべき重要ポイントが、ピックアップされていると言ってもいいだろう。

評者は、元メーカーの技術者だが、写真家の方とお話する機会も多く、仕事を含め写真を撮ることも多い。写真表現に当然関心を持っていて、ペンヤミン、バルト、ソニタグ・・・と、写真論に関する本は、いくつも買って読んでみた。

ところが、これがなかなか判りにくい。頭が悪いのは仕方ないが、理解するための基礎知識、背景への理解が欠けているところもあるのかと思っていた。技術系の知識に偏っていることは間違いない。そんな評者が本書を読んだところ、過去に読んだ本もようやく、なるほどと思えた部分がいくつもあった。原著だけでなく、それを受けて起こった議論、その後の展開など、全体を熟知されている著者による要点を押さえた解説のおかげだろう。評者にとっては、読んだはずの本をあらためて理解する、本書の意図とは、逆方向からのマジカルブックになったわけだ。次は、この本を読まねばと思った本もいくつもあり、既買って積まれてホコリをかぶりかけていた本・・・に手を伸ばすこともできた。

本書は、「写真」そのものを知る、すなわち「写真」とは何かという問いについて、思索を深められる本だ。直接的には、写真を撮り、表現を実践する人、さらには写真作品を鑑賞する人に役立つものになる。だが、それ以外の人でも本書を通し「写真」にあらためて向き合うことで、得られるものも多いと思う。写真論、写真表現論に興味をお持ちなら書くまでもなくお勧めだが、その中にもしも評者のような方がいらっしゃれば、特にお勧めしたい（さすがに少数だと思うが・・・）。

「写真」は、言うまでもなく非常に広範な分野から成り立っている。それが多くの魅力を生み出し、奥深さを感じさせてくれる理由でもあるだろう。それは、分野の異なる多くの方が集う写真学会のユニークさ、活力の元にもなっていると思う。それぞれの分野に相互に関心を持つことで、一段と活性化、発展するはずだ。写真表現は、一般の方と「写真」の接点のひとつでもあり、専門分野に関係なく既に関心を持たれている方も多いただろう。ぜひ本書を手にとりいただければと思う。そして、写真表現に関心がなかった方も、ぜひ一歩踏み出していただければ。さらには、自分のやっていることは、「写真」なのかなと思ってらっしゃるような分野の方でも、思わぬ発見があるかもしれない。いろいろな分野の方に読んでいただき「写真」について思いを巡らしてもらえれば、と思う本だった。

カメラ・写真技術解説家
水口 淳